■第２章　概説■

５世紀ごろの古墳時代中期に、枕は最盛期を迎えます。

とくに、茨城県から千葉県北部の常総（じょうそう）地域では、全国で約120 例ある石枕のうち、約 70 例がこの地域の古墳から出土しています。

常総地域で発達した石枕を「常総型石枕」と呼び、付属品を「立花（りっか)」と呼んでいます。

主に、一辺や直径が、20 メートルから 30 メートルの、方墳や円墳から出土しており、東海地方まで分布を広げました。

常総地域以外では、群馬県の古墳や西日本各地の古墳で枕が出土していますが、常総型石枕のように、広く分布する特定の形の枕は見つかっていません。

古墳時代前期と同じように、各古墳で独自の形の枕が作られていました。

古墳時代中期は、枕の最盛期であるとともに、枕が多様化し、かつ、装飾性が高くなる時期でした。

常総地域では、当時の葬送儀礼で使われていた枕に、石枕を選択的に採用し、独自に発展させました。

これほど流行した背景は明らかになっていませんが、常総地域の首長たちにとって、石枕でないといけない理由があったと考えられます。